

## 第 57 回(2011. 8. 26 配信)

## 雲竹齋先生の歴史文化講座－「中東・アラブ社会 (5)」

## イギリスの目論み(中東の語源)

「中東」という表現は、イギリス人による「ミドル・イースト(Middle East＝中東)」からきている。中世イギリスはインドや中国を指して「イースト(East＝東洋)」と呼んでいた。イースト(東洋)がインドを中心とした東南アジアだとすれば、イーストから西のヨーロッパとの中間に位置する地域はミドル・イースト(中東)ということになる。そこで、「中東」という言葉が出てきた。

イギリス人が「中東」という言葉を使ったのは、イギリスが早くからアジアの植民地支配を目論んでいたからである。特に 17 世紀以降、産業革命を成し遂げたイギリスがインドや中国に支配の伸ばしたのは、そこが香辛料とお茶の主要生産地だったからである。そのために、中継地としての中東地域の支配は必要だった。香辛料は、英国に限らずヨーロッパでは非常に貴重品だった。中世の終わりに、ヨーロッパではペストやコレラが大流行した。この伝染病で全人口の三分の一が死んだといわれているが、この時、スパイスを衣服につけて悪臭を防ぐという非常に奇妙なことが流行した。悪臭が病気を伝染させるという迷信から来たものだが、人々はこぞって香辛料を身につけたという。また、冷蔵庫の無かった当時は、肉食人種のヨーロッパ人にとって肉の保存は死活問題だったと思われる。もっとも、香辛料は腐敗防止というより臭いを消す役割だっただろうが、この香辛料の多くはインドや中国南部など東南アジアが主な生産地だった。シルクロードをラクダの背に積み、はるばるやって来た香辛料は数量も限られていただろうし、それゆえ高価だったことは容易に想像される。当時は銀一袋と胡椒一袋とが同価格だったと記録にある。

ヨーロッパでは、お茶の存在は古くからシルクロードを経由して人々に知られてはいたが、主として薬用として用いられており、コーヒーが発見されてからは、コーヒーが日常的な飲み物になったのだが、イギリスでは紅茶を飲む人が多い。そもそもは、オランダ東インド会社が中国や日本からお茶を買い付けて砂糖を入れて飲んだのが始まりだった。1662 年、イギリスのチャールズ二世に嫁いできたポルトガルのキャサリン王女は、東洋趣味が強かったためイギリス貴族の間にお茶が流行したが、その後、イギリス政府は産業革命の原動力となった飲酒の弊害を憂いて、お茶に目を向けさせてからはその消費量は膨大なものになった。したがって、イギリスは他のヨーロッパ諸国より香辛料と茶葉の必要性が切実だった。

16 世紀以降、ヨーロッパが大航海時代に突入した裏にはこうしたヨーロッパ各国による香辛料獲得のための競争があったからだ、などと言う学者もいる。もちろん、香辛料のためだけでヨーロッパ各国が海に乗り出したわけではないだろうが、これも大きな要因の一つであったに違いない。しかし、第一次世界大戦で「アラビアのロレンス」と呼ばれた考古学者でイギリス陸軍情報将校のトーマス・E・ロレンスが、アラブ民族を指揮してオスマン・トルコ領を占領し、イギリス領アラブ諸国を樹立させ、同様にユダヤ人国家を建設させて、結果的に現在の中東紛争に巻き込んだのはイギリスが大きく関与しているのは事実である。

## 女性のベールは日差し除けではない

友人たちの中には、アラブの女性がベールで顔を隠しているのは、陽射しが強いから日焼けするのを防いでいるのだと思っている人もいる。たしかに日焼け防止には効果的だろう。しかし、本当はイスラムの教えで、女性の身体は手首と顔以外は恥部であり、決して男性に見せてはならないから、外出の際にはベールで顔を隠し、そのうえ衣服の上にダブダブの衣装で頭からすっぽりと身体を包む。外出着がダブダブなのは身体の線が見えて男の邪悪な視線を避けるためだが、最近の若い女性は自分のボディラインを誇示するために、わざときっちりしたものを着る者が出てきたようだ。敬虔なイスラム教徒は眉をひそめるが、この現象は大都会だけで、まだ田舎では見られない。この外出着は、日本人にはチャドルという名前でも知られているが、これはペルシャ語から来ており、アラビア語ではハバラとかアバーヤあるいはヒジャーブなどと呼ばれている。正装は男性同様に純白のところが多いが、黒だけでなく縞模様の柄の衣装だったり地方によって異なる。

女性が外出するときは、チャドルを纏って目だけを出している者や、完全に目をも隠している女性もいる。中には片目だけ隠している女性もいて地方によってまちまちである。これを「アラブの女性は、お洒落感覚が無い」とか「女性には自由がない」とか言う人がいる。それは間違いで、女性が外に出る時に黒や白のベールを被っているのは、道行く男性の淫らな不躰な視線を避ける為であって、家庭の中ではもちろん被ってはいない。『コーラン』の第 24 章には「おまえたちよ、女たちに言ってやるがいい。視線を低くし、貞淑を守れ。外にあらわれるもの以外に彼女らの美しいところは隠しなさい」と唱っている。イスラム教では女性は男性を誘惑する危険な存在とみなされている。そこから逆に、男性のみだらな視線から女性を守るために設けられたものといわれている。しかし、こういったことは友人たちには説明しない。かならず、いろいろなご意見が飛び交い、とんでもない方向に話が脱線していき、收拾がつかなくなることが目に見えているからだ。

しかし、この外出着の下には華やかな模様の服を着ていて、とてもお洒落なのだそうだ。「そうだ」というのは、雲竹斎は男性だから女性の部屋には入れない。家に招かれたときでも女性は男性の部屋には入って来ないから、普段着の女性にはお目にかかれない。もちろん人一倍興味はあるから、そっと女性の部屋を覗いてみたいのだが、もし亭主に見つかったら半殺しの目に遭わされるだろうから、本当は女性の部屋に入ったことはない。ただ、アラブ人の家に招かれて、通りすがりにチラッと見たり、アラブの人に聞いた話や、市場に売られている女性用の衣装から想像するだけでも非常に華やかであることは間違いない。しかし、友人たちには、あたかも見てきたようなことを言わなければならない。チャドルの下を覗いて見たわけではない、などと言えば、これまでの話もみんな嘘だといって私から離れていくに決まっているからだ。

## 車のボンネットで卵は焼けない

どこかで聞きかじってきたか知らないが、「砂漠では車のボンネットの上で目玉焼きができるそうじゃあないか」と、友人の一人が言った。たしかに、車を日向に出しておけば鉄板が熱く焼けてしまい、素手でドアの取手を掴めば火傷をする。そこで、「ボンネットの上で目玉焼きができる」などと大袈裟なことを言う人がいるのも事実だ。鉄板が焼けているから一瞬白身が固まる程度にはなるが、直射日光がいくら強くても、焚き火とはちがって卵を焼く温度にはならないので、黄身までは焼けない。でも、空気が乾燥しているからすぐに黄身の水分が蒸発するので焼けたように見えるのだ。だから、固まることは固まるのだが、「目玉焼きが出来る」と言うのは大げさだ。アラブ人は身振り手振りだけでなく話が大げさだから、そんな連中に染まってしまった日本人が面白半分言いふらしたのだろう。

雨がほとんど降らない乾燥地では、空気中の水分が少ないので熱の伝わり方が極端だから、日中はめっちゃめちゃに暑くなる。人間が暮らせるような場所でも時には気温が 40℃を超えるが、砂漠では砂の照り返しがあるから、地面近くでは 60℃から 70℃くらいまでになる。屋外では、肌を出せば皮膚に火ぶくれが出来から、長袖シャツと上着が必要だが、それでも長くはもたない。すぐに目の前がかすんできて、意識が朦朧として思考力がなくなってしまうが、外気の暑さだけではなく熱い

空気を吸い込むので、身体の芯から焼かれてしまうからである。人間の干物が出来上がるのにはそう時間はかからない。これもちょっと大げさか。でも、このくらい大げさにいわないと、友人たちにはうけない。

こういう乾燥地では、日本人のご婦人方は化粧がうまくのらなくて困るらしい。結婚してからも亭主に素顔を見せないような人には大変で、まかり間違えば夫婦間の危機が訪れる可能性もあるのだが、この話も男女が一堂に会した集まりの席では言えない。言ったら最後、男女間で論争が起き、場合によってはとんでもないとぼっちりが来るかもしれないからだ。